

## 海外紹介 国際学会報告

## ゴールドコーストでの第6回WFAS世界鍼灸学術大会報告

津谷喜一郎、東郷俊宏、津嘉山 洋、黒須幸男

全日本鍼灸学会国際部

はじめに

第6回世界鍼灸学会連合会(WFAS)世界学術大会が、WFAS主催、WHO共催で、2004年10月29(金)から31日(日)までオーストラリア、ゴールドコースト・コンベンションセンターにて開催された。大会の統一テーマは「現代における鍼灸と中国医学」(Acupuncture and Chinese Medicine in the Modern Age)、サブタイトルは「臨床実践、政策、法規、研究、教育、標準化、安全性」(Clinical Practice, Policy, Regulation, Research, Education, Standards, Safety)であった。運営の主体は、オーストラリア鍼灸中医協会(Australian Acupuncture and Chinese Medicine Association: AACMA)で、James Flowerが大会長を務めた。参加者は23カ国から828名で、開催国オーストラリアからは472名と約60%であった。

本稿は、第1に、学術大会に先立って開催された執行理事会と代議員会、新執行理事会、第2に、学術大会のプログラム全体の紹介、第3に、本学術大会でこれまでと違い大きなウェイトを占めたEBM関連の演題の紹介、の3つに分けて報告する。

## ・ 執行理事会と代議員大会

従来のWFAS執行理事会と代議員会の報告は、事実を記すにとどめ、それらに対する全日本鍼灸学会からの参加者の意見は述べずにいた。しかしWFASも1987年の設立からすでに17年たつ。ティーンエージャーとしても年長組に属する。この間世界の鍼灸の状況は大きく変わっており、それに合わせてWFASも変化を求められている。そこで

今回は、各トピックについて、全日本鍼灸学会からの参加者としての考えやコメントを批判を含めて記すことにした。それによってWFASのもつ問題が明らかになり、次世代でWFAS運営に関わるものにとっても参考となろう。

## (1) 執行理事会

2004年10月27日(水)9:20より開催された。全日本鍼灸学会から黒須幸男参与(WFAS副会長)と津谷喜一郎国際部長(WFAS執行委員)が参加した。

議題の多くは、翌日10月28日の代議員会のそれと重なるため、ここでは重要なWFAS憲章の改正に関連した項目について記す。

## 1) WHOとの「公式関係」の明確化

この改正案の英文版は"formal relation"と記されている。WHOは"official relation"という用語を用いており、この点、改正案が事前に日本に送られてきたときにこれを修正すべきと回答したが、修正されていない。WFAS執行部ないし事務局のミスである。こういうことが重なると多くのメンバーは無力感を感じてWFAS事務局にマジメに回答しなくなる。また実際、すでにそのような事態になっている。

## 2) WFASの目的

「世界の衛生保健活動における鍼灸医学の地位向上と発展に努める」とし、これまでの「鍼灸学」ではなく「鍼灸医学」とし、保健衛生工作(health-keeping)という用語を用い鍼灸医学が社会において果たす意義を拡大した。さらに「WHOの"伝統医学戦略"の実施、推進」、「専門性の向

上、「鍼灸医学国際標準化の推進」などをWFASの責務として新たに明文化した。

### 3) メンバー資格の緩和化

WFASは各国の鍼灸関連学協会がメンバーである。これまで当該国で3年以上の実績と50名以上の個人会員を有する合法的な鍼灸団体を、1年以上30名とする案がでたが、日本としてはWFASメンバーは、その「数」を増やすことではなく「質」を高めることがより重要であるとの、従来からの意見を述べた。しかし、中国側役員がWFASメンバー数を増やしたがっている理由は、2003年9月に中国政府の肝いりで同じく北京で設立された「世界中医薬学会連合会」(World Federation of Chinese Medicine Societies: WFCMS, <http://www.wfcms.org>)に対抗するためなのは、鄧良月会長の説明からも明らかであり、日本としては強くは反対しなかった。

また、第9条の、各国で複数の学協会がある場合には連合体を作りひとつにまとめてWFASメンバーになるべしという努力規定は、削除することが提案された。上記と同じ理由から日本は反対した。

最終的に、存続年と個人会員数はそのままとなったが、執行理事会の3/4の承認でその基準を満たさなくても準メンバー(associate member)ではなくメンバー(member)として加盟を認めることとなった。第9条は削除されることとなった。

### 4) 執行理事などの増員

全体の執行理事の数をこれまでの25人から30~40人とし、このうち副会長を8人から12人に、ヒラの執行理事を13人から18~28人とするものである。実際には地域割りで執行理事は決まるが、なるべく多くのWFASメンバーの代表に「役」をつけてあげてメンバー数を増やしWFASを活性化しようとするものである。「役員の水増し」には違いないが、ある面やむを得ないところもあり、日本は賛成も反対もしなかった。

### 5) 顧問委員会の設立

会を活性化するために、顧問委員会を設立することとなった。英語では"consultative committee"と"advisory committee"と2つの用語が使われたがはっきりしないままとなった。

### (2) 代議員会

2004年10月28日(木)9:20より開催された。

#### 1) 日本からの参加と代議員会の意思決定メカニズム

全日本鍼灸学会としては、WFAS現副会長の黒須と現執行委員の津谷の2人の他に、WFASメンバーとしての学協会の構成会員数にしたがったWFASへの年会費US\$2,000(約20万円)に応じて6人分の、計8人分の代議員人が参加することが出来る。投票に当たっては各自一票を持つ。

今後のこともありこのシステムを紹介しておこう。あらかじめ北京のWFAS事務局に全8人の名前をe-mailかfaxで届けると、「世界鍼灸学会連合会会員大会代表报到証」(The Card for Delegate to the General Assembly of WFAS)が送られてくる。実際には現物の郵送は間に合わず、e-mailに添付されて届く。このカードシステムは、1996年のニューヨークでの代議員会において、代議員ではない人が多く参加し、投票に当たってそれらの人も挙手をするなど、投票の管理が不徹底であることが強く批判されたために始まったものである。ただし今回も参加者のチェックは甘いところがあり、挙手の投票数は事務担当者が一人ひとり数えているものの、会場にいる参加者が投票する権限がある人のみなのかどうかの確認は甘い。つまり一部のみ形式を整えてはいるものの投票全体の「質管理」が出来ていないのである。

もともと役員を多くを中国人が占め、北京に事務局があるWFASは、多くの事柄が「中国流」で決まる。国家の意思決定機関であり、日本の国会に対応する全国人民代表大会も、中国共産党の決定を追認するだけの「ゴム判会議」とされてきたお国柄からか、「投票」は形式的であり、別の意思決定メカニズムが存在することが、WFASのこのような決定方式にも反映している。しかし、1992年の全人民代表大会での揚子江の三峡ダムの建設の可否を問う投票では、反対・棄権票の数が明確に示された。WFASの中国側役員は、自国での投票システムが改善したものになっていることを学習すべきであろう。代議員会での意思決定がきちんとなされることは外部から見たWFASの評価の大きなウェイトを占める。

本代議員会では、全日本鍼灸学会から、黒須、津谷の他に、形井秀一、木村通郎、東郷俊宏、内田輝和、渡邊裕、の5名が参加し、坂本歩は委任状を提出した。

## 2) 活動報告と財務報告

代議員会は、中国国家中医薬管理局副局長・李振吉氏の貴賓祝辞がまずあった。執行理事会でこの順番が承認されているとはいえ、初めて代議員会に参加する人は、なぜ世界大会に中国の役人が最初に挨拶するのか不思議であろう。つぎに、学会の発展に多大な貢献を果たし最近逝去した王鈺副会長（アルゼンチン）、J. Goodman 執行委員（英国）の両氏のために黙祷を捧げ、哀悼の念を表した。

ついで事務局長の沈志祥より基調報告があった。報告では、過去四年間の国際学術交流の状況、新規加盟団体の申し込み状況を紹介するとともに、WHOとの提携関係の強化や憲章の改正が必要であるとして参加者への理解を訴え、また Health Care Industry への commitment が WFAS の現況を打開していく上で鍵になるとして報告を締めくくった。

沈氏について財務部長・李維衡から前回の2000年のソウルでの代議員会以後の過去4年間の収支報告があった。会費を滞納するメンバーが多数に上り、会費納入実績はトータルでUS\$68,000で、本来支払われるべき額US\$15,100の約45%に止まっている。不足分については外部からの援助、寄付に大きく依存しており、中国政府からUS\$32,000、中国国内の民間団体からUS\$89,000の援助を受けていることが報告された。すなわち4年間の支出はUS\$189,000（約2,000万円）であり、そのうちメンバーからの会費収入はUS\$68,000（700万円）で、35%に過ぎない。

日本円で年単位であらわすとWFASは約500万円で運営されており、そのうちのWFASメンバーからの収入は200万円弱である。このうち全日本鍼灸学会は先に述べたように20万円（US\$2,000）払っている。ちなみに、全日本鍼灸学会の年間予算は、学術大会費と予備費を除いて約5,000万円でありWFASの約10倍である。

中国は1990年代以後急速に経済発展したとし

てもまだ発展途上国であり、また中国以外のWFASメンバーの所在する国も発展途上国が多いことを日本人は認識すべきであろう。

## 3) 新メンバーの加盟

当日配布された書類上は2つの加盟希望学協会があった。

ひとつは、日本にとって気になる韓国からで、「韓国東西鍼灸学会」(West-East Acupuncture Society of Korea) が承認された。韓国人で中国で中医学や鍼灸を学んだグループで、ライセンスのない鍼灸師とされる。

ノルウェーからの Norwegian Natural Medicine Association は、前日の執行理事会のメンバーである Norwegian Acupuncture Association の会長の Arne Kausland が、現在、ノルウェー政府が計画している鍼灸師の資格制度案に照らし合わせて考えると、この新メンバー加盟の学協会はふさわしくないとしたため、その時点でリストから落ちていた。

一方、今回の代議員会では審議されなかったが、韓国の「東洋鍼灸学会」が事前のメンバー審査の資料としてその簡単な内容が全日本鍼灸学会に届いていた。これは釜山を中心とし1962年に設立されたライセンスのない鍼灸師の139人からなるグループ。1960年代に「官認」の鍼教育を受けたとされる。WFAS事務局作成の資料では英文名は Korean Acupuncture and Moxibustion Society (KAMS) となっており、韓医師による学会と同じで混乱する。

いずれにしても、WFAS入会希望学協会の審査のための資格審査委員会は十分機能していない模様である。もし「東洋鍼灸学会」がすでに加盟しているとすると、韓国からは韓医師のグループが1つと非韓医師のグループが3つの全部で4つとなり、混迷はさらに深化しているといえる。

## 4) 新執行理事の選挙

代議員会で最も重要な議題がこの選挙である。代議員の数か月前に地域割りに応じて、各WFASメンバーに候補者推薦の依頼が届く。それに対し北京のWFAS事務局へ略歴を送る。またしばらくすると海外の学会から郵便やファクスで自薦他薦の投票依頼が届く。

執行理事の選挙は、先に述べたような拳手ではなく投票用紙に書くスタイルで投票の質はいくらか高い。先に採択されたWFAS憲章に基づき、執行理事の数は増えている。結果は、会長の鄧良月はじめ中国側の役員は留任。副会長は、日本からの黒須は留任。なお、副会長は地域割りになされ、これまでの7人から11人に増加。ただし北米からは2名のところ1名しか候補がいなかったため現在全体で10名。増えた3人は、申泰鎬（韓国）、Arne Kausland（ノルウェー）、Liu Chih-Ming（ブラジル）。

執行理事は全部で17名で、津谷は留任。なお1996年のニューヨークでの代議員会の混乱後、WFASの活動には参加のなかった、WFASの1987年設立以来のメンバーである大韓韓医師協会（Association of Korean Oriental Medicine: AKOM）は、今回、その配下の大韓韓医学協会（Korean Oriental Medical Society: KOMS）の分科会の大韓鍼灸学会（Korean Acupuncture-Moxibustion Society: KAMS）として代議員会に参加した。結果としてKAMSの金容奭（Kim, Yong-Suk）が執行理事となった。全日本鍼灸学会（JSAM）は、2004年2月14日にソウルで、KOMSとKAMSとの三者で交流合意書を交わしており、今回のゴールドコーストの大会と代議員会への参加についてもいくらかのアドバイスをしており、KAMSとしてWFASに復帰したことはとりあえず喜ばしい。

##### 5) 今後のシンポジウムと世界鍼灸学術大会

2005年のシンポジウムは日本人の土屋光春の率いるポルトガルのAssociacao Portuguesa de Acupunctura Electricaが対抗馬なくリスボンに決まった。

2006年のシンポジウムは1999年に開催国内定していながら政情不安のために中止を余儀なくされたインドネシア（開催予定地：バリ）と、マレーシア（同：クアラ Lumpur）とがホスト国として名乗りを上げ、両国代表者ともによく練られたパソコンとビデオによる presentation を展開した。また日本も上述の二国とは別に小規模だが質の高いシンポジウムの開催国としてエントリーしたが、投票の結果はインドネシア、マレーシア

が伯仲し、2006年に両国でそれぞれ開催することとなった。日本は全日本鍼灸大会岡山大会と関連させてシンポジウムを計画したが2006年の目はなくなった。

2007年は中国がWFAS 20周年記念の大会ないしシンポジウムを開きたいとの希望を出しており、多くのメンバーはそれに賛成であった。だが日本にとって2007年の目はまだ残っている。中国の会は10月に予定されており、春に日本で小規模のシンポジウムを行うことは2005年のリスボンのシンポジウム時に開催される執行理事会で了解されれば可能である。

2008年WFAS世界鍼灸学術大会は、イタリアのAldo Liguori率いるItalian Association of Acupuncture-Moxibustion and TCMと、韓国の申泰鎬が率いる韓国鍼灸師会（Korean Acupuncture Association: KAA）の2つが名乗りを上げた。イタリアはローマの、韓国は済州島のプロモーションビデオを使いはでな宣伝を行った。韓国はすでに2000年にソウルで第4回世界鍼灸学術大会を開催しているが、これは当初予定されていたオーストラリア大会が開催不能になったことが背景にあり、今回は満を持して済州島で開催したいと強いアピールを行った。投票では大差でイタリアを圧勝、開催国となることが決定した。

多くの票が入った理由のひとつとして韓国内の鍼灸の資格制度をめぐる複雑な状況を、WFASメンバーの多くは理解しておらず、また、申泰鎬の事前の運動が効を奏したと思われる。投票に勝ったときに、彼は振り向き私にウィンクしたものだ。韓国の韓医師にとっては目の上のたんこぶかもしれないが、チャーミングな人物である。

##### 6) ライセンスの国際化

代議員会では最後に国際資格標準化に関連した李振吉の講演があった。国際化が進む中国伝統医学のレベル維持と各国での地位向上を目的として、医師、教師、薬剤師、護士（看護師）それぞれについて資格試験のみならず、臨床経験年数に応じた5段階の水平試験（レベル試験）を実施することが提案された。日本でもフィリピン・ナースやタイ・マッサージ資格の日本での認知が議論されており、このような動向には気を配っておいたほ

うがよいと思われる。

### (3) 新執行理事会

2004年10月28日(水)20:00から開催された。参加者は疲れた様子だが、再任された鄧会長は、1時間に及ぶ長口舌で、その間誰も発言せず、居眠りする人も散見された。いまだき珍しい会議のスタイルだ。中身はWFASの活性化を強く希望するもので、気持ちは理解できるが、現・執行体制がそのまま実施可能かは危うく感じられた。

そこで長い演説が終わったところで、「執行理事の平均年齢は60歳を越している。幸い顧問委員会が設立されることになったので、60歳以上のものはすべて顧問委員会に移して、執行体制の若返りを図るべきだ、WFASには新しい血が必要だ」と発言したところ、急にみんながそわそわして発言し始めたが時間切れとなった。

翌日、WFAS事務局で具体的な作業を担当している、数人の若いスタッフから「よくぞ言ってくれた」と感謝された。

## ・ 学術大会プログラムの内容

### (1) 開会式

開会式は2004年10月29日(金)9:00からWombat Arenaにて獅子舞とアポリジニ・ダンスで幕を開けた。大会長James Flowersが開会の辞を述べ、その後クイーンズランド州知事・Peter Lawer、保健長官代理、中国国家中医薬管理局副局長・李振吉、WHO西太平洋地域事務局伝統医学アドバイザー・Seung-Hoon Choi(崔昇勲)、WFAS会長・鄧良月、ゴールドコースト市長、オーストラリア駐在中国大使館科学技術顧問らの挨拶が続いた。開会式は太極拳の演舞をもって終了した。ついてWFAS名誉会長である王雪苔が「鍼灸医学の特色を論ず」と題する基調講演を行って午前のプログラムを終了した。

### (2) 第1日目 2004年10月29日

午後からは上記、1) Wombat Arena会場の他、2) Koala、3) Kangaroo、4) Kookaburra、5) Platypusの計5会場に分かれてセッションが行われた。

以下、会場ごとに紹介する。

#### 1) Wombat Arena: 依存症(薬物・アルコール)

に対する鍼灸治療について、WFAS副会長でもあるNguyen Tai Tsu(ベトナム)とKatherine Berry(オーストラリア)から報告があった。ついで中国から肥満治療に関する報告が劉一凡(中)と徐斌(中)の二人からなされた。

- 2) Koala Room: 米国のShengxing Maによる基調講演「鍼刺激が心血管に及ぼす作用を媒介する酸化窒素について」に引き続き、台湾の謝慶良による「脳における虚血を有する/有しないラットにおける脳血流量に対する電気鍼刺激の効果」、中国の許金森による「経脈周辺組織とそれ以外の組織における熱伝導性の比較」、オーストラリアのVictor Vicklandによる「列缺と復溜穴の心拍動に及ぼす影響」の計四題の口演があった。
- 3) Kangaroo Room: 米国のRichad Hammerschlagによる基調講演「鍼灸研究の方向性」のあと、Charlie Cangli Xue(豪)による「臨床研究デザインと中医学理論(招待講演)」、Barry Nester(豪)の「鍼灸医学の質的研究」が続いた。
- 4) Kookaburra Room: 様々な鍼灸の手技に焦点が当てられ、Fabio Zampieri(伊)による「耳鍼と体鍼について」、Giovanni Garofano(伊)による「頭部におけるレーザー鍼治療について」、Liang Hoo Gan(伊)による「中医学における手鍼と耳鍼について—私の経験から」、またPaul McLeod(豪)は、「深谷伊三郎の直接灸(米粒灸)について」と題し、日本の深谷灸を紹介した。
- 5) Platypus RoomではDaniel Deng(豪)による「鍼刺感の伝導」と題するWorkshopが行われた。

15:00よりtea breakに入り、午後後半のsessionは15:30に再開した。各会場における主な演題を列挙する。

- 1) Wombat Arena: WFAS副会長Cedric Cheung(加)による招待講演「2型糖尿病に対する鍼灸治療」(招待講演)、Liu Xin(豪)「糖尿病治療と気功」(招待講演)、Chang Shih-liang「鍼灸治療とインシュリン反応性」、Maruro Cucci(伊)による「内分泌疾患における衝脈を用いた治療の役割」。

- 2) Koala Room : Yong-Suk Kim (韓)「電気刺激後のラットの脳皮質におけるNADPHジオフェラーゼ、ニューロペプチドY、腸内ペプチド」、宋虎傑(中国)「水頭症に対する鍼灸、脳康霊併用療法」、陳華徳(中国)「肝陽上亢証の高血圧に対する耳からの放血治療について」、旭山夏弥子(日)「日本のスギ花粉症に対する中医弁証に基づく鍼灸治療と、血液、鼻汁にみる免疫反応」。
- 3) Kangaroo Room : EBMに関連して以下の三題の口演があった。Volker Scheid (英)「中医鍼灸における更年期障害の治療 その文化と歴史」、John McDonald (豪)「二重盲検法は何故鍼灸研究において不適当なのか」、Felix Wong (豪)「EBMと中医学研究 その困難性」。
- 4) Kookaburra Room : 鍼刺の深さに関連した演題が続いた。すなわちJunzo Tsujita (日)「刺入深度と筋疲労に対する治療効果について」、Jung-sung Park (韓)「足関節捻挫に対する鍼灸治療について - 浅刺と深刺」、Weihong Li (豪)「局所圧痛に対するL11、L14深刺の効果」など。
- 5) Platypus Room: 先述のPaul McLeod (豪)が直接灸のデモンストレーションを行った。

### (3) 第2日目 2004年10月30日(土)

- 1) Wombat Arena: 鍼によるガン治療に関連してHenry Liming Liang (豪)による「鍼によるガン治療の安全性と有効性」(招待講演)、Syarif Sudirman (インドネシア)による「鍼治療によるガン鎮痛」などの口演があった。10:30に始まる後半のセッションでは中国の薛立功による経筋理論に関する基調講演が予定されていたが、欠席のため中止となり、John McDonald (豪)「経絡理論の記録」、Wong Lun (豪)「内経理論と鍼灸臨床」といった講演が行われた。
- 2) Koala Room : 前半は臨床研究に、後半は治効機序に関連した演題が続いた。辛君平(中)「特殊鍼治療による胃潰瘍、十二指腸潰瘍の即時効果」、Wen Cheng (シンガポール)「足三里穴鍼刺による消化不良に対する効果」、Sean Scott (豪)「偏頭痛に対する鍼治療効果の神経

生物学的考察」、Shi Ping Zhang (香港)「鍼刺の抗炎作用について考えられる機序」、Koonsadi Saptura (インドネシア)「鍼刺激後の神経伝導について」など。

- 3) Kangaroo Room : 主として臨床研究の方法論をめぐって以下のような演題が組まれた。Ke Li (豪)「Hierarchical Linear Model と鍼灸研究」、Chris Zaslowski (豪)「偽鍼 本当に有効なコントロールなのか、それともただの騙しにすぎないのか?」、Meaghan Coyle (豪)「Placebo鍼の有効性と信頼性の評価」、Caroline Smith (豪)「女性の健康に対する鍼灸効果の研究をめぐって 臨床試験のあり方」、Jerzy Dyczynski (独)「Quality Management を基礎においた臨床研究について」、など。
- 4) Kookaburra Room : レーザー鍼や、外傷に対する中医学的治療、健康管理、肥満治療など多分野わたる演題が見られた。Micheal German (独)「無痛レーザー鍼を用いた臨床とその生物学的効果」、Gwo-Wuu Shyu (加)「鍼治療と膏薬の併用による癒痕組織の治癒過程」、Juliana Tjandra (インドネシア)「鍼灸治療によるバランスのとれた身体作りと健康管理」、Susanna Rughini (伊)「中医食療法と低カロリー療法を用いた肥満治療の比較 ランダム化試験」、Tomi Hardjatno (インドネシア)「肥満治療における電気鍼の役割」など。

なお、この日の午前中にポスターセッションに関してpresentationの時刻告知があり、戸惑っていた演者が多数見受けられた。ポスターセッションについては後述。

午後のセッションについて述べる。

- 1) Wombat ArenaではWHO西太平洋事務局伝統医学アドバイザーのSeung-Hoon Choiから「WHO伝統医学戦略とその進展」と題する基調講演が行われたほか、John McDonald (豪)からはオーストラリアにおける中医教育システムに関する報告がなされた。
- 2) Koala Room : 前半は関節炎、鎮痛に関連した報告が、後半は様々な臨床研究、実験研究に関連した報告があった。晋志高(中)による「関

節炎に対する鍼治療の分析」(基調講演) John Deare (豪)「Fibromyalgiaに対する鎮痛処置 文献レビューと臨床応用」(招待講演) Aldo Liguori (伊)「偏頭痛に対する鍼治療 placebo に依らない治療効果」(招待講演) 東貴栄 (中)「太陽、風池穴を用いた偏頭痛治療」 Hong Xu (豪)「鍼灸およびその関連治療による骨粗鬆症の予防と治療」(招待講演) など。

- 3) Kangaroo Room: 午後前半の演題は主として生理学的な問題を扱ったものが主体となり、後半はEBM関連の演題が続いた。Zhen Zheng (豪)「鍼刺によってもたらされた得気の神経伝導路」(招待講演) 木村道郎 (日)「経絡と脳脊髄液との関係」 Federico Cardona (独)「気と時間 中医における時間と現代の時間生物学」 Damien Ryan (豪)「EBM 鍼灸臨床におけるエビデンスの活用」(招待講演) Stephan Janz (豪)「EBMはArtとしての鍼灸を否定するか?」 John McDonald (豪)「EBMにもとづく治療穴の選択」 など。
- 4) Kookaburra Room: 主として中医学の理論体系に関する演題がみられた。John Terry (豪)「中国医学のパラダイムとは何か?」(招待講演) Peter Ferrigno (豪)「中医の知識および臨床実践に対する反応」 Yifan Yang (豪)「二重診断」 Caroline Smith (豪)「多様性への尊重と祝福 五行鍼灸を用いた健康増進」 Mary Garvey (豪)「現代における精神疾患治療への五神モデルの適用」 Cameron Tukapia (ニュージーランド)「先ず神を治す」 など。
- 5) Platypus Room: Zahir Behdasht (豪)「ヴェーダ時代の鍼灸治療」 Simin Chen (豪)「太極の気を循り、経絡の気を行らすー脊柱導引の臨床的意義」 など。

2日目は、全てのセッション終了後、Convention Center よりGold Coast三大テーマパークのひとつ、Dream World に会場を移して懇親会 (Gala Dinner) が催された。

(4) 第3日目 2004年10月31日(日)

- 1) Wombat Arena: 臨床的なテーマに沿って次の

講演が行われた。Sofyan Rangukuti (蘭)「腰椎症の診断と治療についてのもう一つの視点」 Hoc Ku Huynh (豪)「頸椎症に対する四穴治療の応用」 石学敏 (中)「醒腦開竅法による中風治療の臨床研究報告と実験研究」(基調講演) 劉喜昕 (中)「脳腫瘍に対する鍼治療と膏薬治療における穴位」 ほか。

- 2) Koala Room: 前半は生殖器疾患、後半は産科関係の臨床研究発表が組まれた。Rinaldo Rinaldi (伊)「男性不妊症患者八名に対する鍼灸按摩治療効果の観察」 Jann Mehmet (豪)「中国伝統医学によって精子の奇形、総数、運動性の改善は可能か? ランダム化臨床試験を通じて」 Debra Betts (ニュージーランド)「出産前の鍼灸治療と分娩時の医療介入減少との相関性について」 Aguston Idayanti (インドネシア)「乳房局所鍼刺とプロラクチン分泌との関係」 ほか。
- 3) Kangaroo Room: 鍼灸教育の国際化、鍼灸医学の標準化など、社会医学としての鍼灸に焦点を当てた報告が組まれた。Kerry Watson (豪)「中国医学の国際教育および臨床ガイドラインの進展」 Judy James (豪)「鍼灸の教育スタンダード」 Sri Moerdowo (インドネシア)「インドネシアにおける鍼灸医学の発展」 James Flowers (豪)「戦略展望 - Professionalとしての自律的なアイデンティティを維持するために」(基調講演) Judy James「鍼灸中醫師のための全国統一標準を適正化、維持するために」(招待講演) ほか。
- 4) Kookaburra Room: 前半は主に中医理論と脊髄損傷に対する中医治療について、後半はアレルギー疾患の鍼灸治療に関連した演題が生まれ、日本人の口演もこの両セッションに集中した。清野充典 (日)「東洋医学理論の源流を求めてー易」 江川雅人 (日)「成人アトピー性皮膚炎に対する鍼灸治療」 渡邊裕 (日)「花粉症に対する鍼灸治療」 Felix Tirutaksmanah (インドネシア)「中国医学の視点から見たアレルギー」 など。

午後は13:30から15:00まで以下のようにセッ

ションが組まれた。

- 1) Wombat Arena : 主として小児の精神疾患に対する治療に焦点が絞られた。Inderjit Singh ( 印 ) 「知力遅鈍の小児に対する腎経補益治療」など。
- 2) Koala Room : 劉保延 ( 中・WFAS 執行委員 ) 「鍼灸臨床研究 assessment 向上に関連する諸問題」ほか。
- 3) Kangaroo Room : 中医教育に関連する以下の演題が見られた。Wendy Morrow ( 豪 ) 「オーストラリアにおける非大学系の鍼灸教育機関規制問題」、Koosnadi Saputra ( インドネシア ) 「インドネシア鍼灸教育における virtual learning の試み」、Tomi Hardjano ( インドネシア ) 「鍼灸教育における problem based learning」など。
- 4) Kookaburra Room : 主として中薬関係の演題が組まれた。Suping Wen ( 豪 ) 「中西薬の相互作用」、Xiaoshu Zhu ( 豪 ) 「中医診断分析に基づく新薬の副作用」、Wade James ( 豪 ) 「中草薬を用いた医学実践の変容」ほか。

#### (5) ポスターセッション

ポスターセッションは先述した通り、開会時までに発表日程の告知がなく、二日目の午前中より事務局メンバーがポスターにスケジュールを記入するという形の告知を行った。また持ち時間が1人5分と短く、発表者は一様に戸惑いを隠しきれなかった。ポスター発表のロケーションそのものは昼食、休憩場所と一致しており、コーヒー、食事をとりながらポスターを見ることができるなどアクセス面での条件は良かっただけに、発表者とのコミュニケーションが希薄になったのは残念といえよう。

今大会における日本人の発表はほとんどがポスターによるものであり、かつポスター発表全体の3割近くを占めた(56題中15題)。多くの audience を集めた演題も少なくなく、短い発表時間に悩む演者が目立ったのは悔やまれる。

#### (6) 閉会式

15:30 より Wombat Arena にて閉会式が行われた。WFAS 財務部長・李維衡より閉会の辞が述べられたあと、優秀演題の発表、くじ引き、2008

年までの国際シンポジウム、世界大会開催国代表からの挨拶、大会長 James Flowers 挨拶と続いた。大会長挨拶では事務局メンバー全員の紹介がおこなわれ、その労をねぎらった。また最後に前日の Gala Dinner に登場した現地歌手 Pamela Joy が再登場し、オーストラリアの国民歌 Waltzing Matilda と Auld Lang Syne ( 邦題：蛍の光 ) を会場に集った全員で合唱し、三日間の世界大会は幕を閉じた。

#### ・ EBM 関連のセッション

大会では多種多様な発表が行われた中から、EBM や臨床研究の方法論に関わる演題を選んで報告する。

EBM 関連演題だけのセッションを組めるほどこの方面に関心が集まっていることは本大会の特徴の一つであり、アカデミックな面での発展を示すものであった。幾つかの講演や演題は注目すべき内容があったが、その一方で「世界鍼灸学術大会」と銘打ってはいるが世界水準とは言い難い発表や討論も目についた。Medical Acupuncture ( 医師鍼灸 ) 系の ICMART ( International Council of Medical Acupuncture and Related Techniques ) の第11回世界医師鍼灸学会が、同じくオーストラリアのシドニーで10月1~4日という同時期に開催されていたのが象徴するように、エビデンスに基づく相補代替医療 ( Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine: EB-CAM ) の主要プレーヤーの多くを欠いた WFAS はローカルな存在から脱皮しきれていない。とはいえ、鍼灸に限った世界的権威のある学会が未だに存在しないこともまた事実である。

プログラムには載っていないトピックとして、ドイツの保険組織から研究資金を供給され実行されていた鍼の大規模臨床試験 ( German study ) がついに終了したことの報告があった。欧米で進行中の幾つかの鍼の大規模臨床試験の中でも、腰痛、膝痛、頭痛の試験を同時に行う German study は注目を集めていたが、解析はまだこれからであり最終結論に至るにはまだ時間がかかるということである。



### 1) 鍼灸におけるエビデンス

原則的にはEBMを受け入れた上での議論が多く、EBMを根本的に否定する演者にはEBMに対する誤解があり、EBMはRCT至上主義であるという俗説に基づく議論を行っていた。

D. Ryan (豪:ピクトリア大)は、鍼臨床家がもちいる知識を質的研究の対象とし、いわゆるエビデンスと鍼臨床で実践にもちいられている知識の乖離を指摘した。臨床家としてEBMを実践する上で入手可能なエビデンスは臨床に応用できにくく、臨床において施術者が具体的に用いることの出来る適切な知識を増やすための鍼研究の戦略の確立と優先順位の検討を行う必要があると思われた。

S. Janz (豪: AACMA)は、RCTの結果解釈には数々の制約があり一般化できない等のEBM批判を概観し、鍼の現実を反映する適切な方法論が現れるまで鍼灸師はRCT以外の研究方法を選択するべきであるとした。また、コクランの腰痛に対する鍼のレビューを引き合いに出して、否定的なエビデンスは臨床適用や研究を縮小させるとも言っていたようだが、このコクラン・レビューが出版された後になかなりの量の腰痛に対する鍼治療のRCTが出版され、レビューグループはupdate中のレビューは鍼に肯定的な結果であることをSAR (Society for Acupuncture Research) シンポジウムで報告している。

J. McDonald (豪: オーストラリア自然医学カレッジ)が "エビデンスに基づく経穴選択の方法" という演題で、使用経穴の選択に関わる種々の伝統的理論を整理していたが、evidence baseというよりはtext baseのツボ運用法講義という内容であった。

### 2) 鍼のプラセボ効果と偽鍼

鍼のプラセボ効果と偽鍼は鍼の臨床研究における今日的論点の一つである。各種の偽鍼の治療的活性を測定しようという試みが注目された。

C. Zaslowski (豪: シドニー工科大)は6種類の(偽)治療の圧痛閾値に及ぼす影響を、鍼の効果の構成要素(自然経過、注意やプラシボなどの非特異的效果、DNIC、経穴の特異的效果等)の概念で整理した上で報告し、皮膚を突き通すタイ

プの「侵襲的偽鍼」は生理的效果がありプラシボとは言えないとしていた。

M. Coyle (豪: アデレード大)は体外受精を受ける女性を対象に伸縮型の非侵襲的偽鍼の信頼性と妥当性を評価した結果、偽鍼と真の鍼の間には刺入時の痛みと鍼の刺入感覚に違いが認められたが偽鍼は信頼できると報告した。J McDonald氏は鍼の臨床試験における偽鍼の問題を議論し、

数回のセッションの内に遮蔽が破れる可能性が増大する、偽鍼の仕組みが知れ渡ったり鍼の経験や知識が普及したりすると適用可能な集団が減少するなど偽鍼の弱点を論じたが、オリジナルデータがないので観念的な議論となった。

ポスターセッションで津嘉山(日本、JSAM)は鍼経験者における伸縮型偽鍼の信頼性のデータを発表し、鍼の経験、経穴の性質、文化背景、偽鍼の視覚的效果が偽鍼の信頼性に影響を与えている可能性を論じた。

### 3) 臨床研究の方法論

鍼の臨床研究方法は東洋医学の特徴を研究に反映するべきであるという意見はもっともであるが、具体的な打開策は明確ではない。

米国SARメンバーのR. Hammerschlagは最近の鍼灸研究の方法論などを概観した後に、報告に際しSTRICTAとCONSORTに従う、東洋医学の証などのパターンを尊重して研究をデザインする、費用対効果に焦点をあてる、平均してしまうと埋もれてしまう個別の反応を評価する、などの臨床研究の方向性を示唆したほか、AcuMedicineやEATM (East Asian Traditional Medicine)などの呼称を提唱していた。

CC. Xue (豪: RMIT大)は中医学的に異質な集団が臨床試験の対象中に含まれる問題を解決する方策として、現代医学的組入基準で対象を選択した後に中医学的基準を適用して単一の中医学的カテゴリーの被験者を得るDouble selection processを提案した。通常の臨床試験以上に症例確保に苦労する弱点は自ら言及していた。

B Nester (豪: ピクトリア大)が近年医学研究でも注目されている質的研究について講演し、質的研究の代表的な研究方法であるEthnography, Grounded theory, Phenomenologyについて解説し

た。Ryan 氏の研究のように知識や信念の枠組みを探る上で鍼灸研究の方法論として質的研究は魅力がある。

4) オーストラリアの臨床研究および規制の状況  
オーストラリアにおける(中医学)臨床研究の状況について、A Bensoussan(豪:西シドニー大)によると西シドニー大は衛生当局の協力の上で、公立病院において心血管病、高齢者医療、胃腸病学、女性医療など様々な領域の20以上の(4つの第三相試験を含む)臨床試験を実施している。CA Smith(豪:南オーストラリア大)は女性の健康に関わる妊娠悪阻、陣痛誘発、月経痛などの領域の研究経験を紹介した。

オーストラリアにおける鍼の規制の現状について、ビクトリア州で鍼と中薬草の規制(登録)を目的としたChinese Medicine Registration Actが2000年に州議会を通過して登録委員会が構成されて以来682人が有資格者として登録されており、現在第2ステージにむけて施術者の質の向上のための継続教育と研究の促進などを企画しているとV. Lin(豪:La Trobe大)が報告した。また、連邦レベルの規制(登録)を準備する目的で、鍼と

中薬草教育の標準を統制するための全国教育評議会と、鍼と中薬草の認可基準を提供するための全国中医施術者認可委員会の2組織を設立するために、2002年に業界の資金支援がありプロジェクトが進行していることも報告されていた。

おわりに

本報告では、前半にWFAS全体の運営である執行理事会と代議員会、後半に具体的なプログラムの紹介を行った。前者がなお旧態依然としたシステムで動いているのに対し、後者は世界的なEBMの動きなどを反映して質の高いものも多かった。WFASにもようやく欧米から始まった世界的流れが入り込んだようである。

WFASの公式のweb siteはまだ開設されていない。本ゴールドコースト大会後、各国からの代議員会でWFASの運営に関してe-mailでやりとりすることが急に多くなった。WFASも情報公開を求められるようになってきた。

運営にうんざりすることも多いが、それなりに発展する余地もあるということを感じさせるゴールドコーストの日々であった。

Foreign Introduction World Conference Report

## Report on the WFAS 6th World Conference on Acupuncture at Gold Coast: Including Reports from the Executive Committee and General Assembly

TSUTANI Kiichiro, TOGO Toshihiro, TSUKAYAMA Hiroshi, KUROSU Yukio

Department of International Affairs, The Japan Society of Acupuncture and Moxibustion (JSAM)

### Abstract

The WFAS 6th World Conference on Acupuncture was held from 29 to 31 October 2004 in Gold Coast, Queensland, Australia. The Executive Committee Meeting and the General Assembly were held on 27 and 28 October, respectively. A total of 828 participants from 23 countries attended, majority of whom (472) were from Australia. Unlike in previous conferences, this latest conference featured a number of high quality presentations, including those on the evidence-based acupuncture movement. The WFAS Constitution was amended to reflect its official relationship with the World Health Organization (WHO), and to establish a more concrete objective, i.e. "...to develop the medical science of acupuncture-moxibustion, and to enhance the state and function of acupuncture-moxibustion in the health keeping of the people of the world.." The number of Executive Members was increased from 25-30 to 30-40, and that of the Vice-Presidents from 8 to 12. The Federation's weak financial status was noted. Expenditure for four years (2001-2004) was US\$189,000, while actual income in member fees was only US\$ 68,000, or 45% of the expected US\$151,000. The balance was supported from the Chinese government-US\$32,000, and Chinese NGOs-US\$89,000. Inefficiency and stagnation in WFAS management were also noted. "New blood" is needed to accelerate WFAS development in the New Millennium.

*Zen Nippon Shinkyu Gakkai Zasshi (Journal of the Japan Society of Acupuncture and Moxibustion, JJSAM) 2005; 55(1): 86-96.*